

ハンドボール競技におけるペナルティースローの駆け引きに関する研究

藤井 保奈美 (200812048、ハンドボール方法論)

指導教員：河村 レイ子、會田 宏

キーワード：シューター、ゴールキーパー、駆け引き

【目的】

ハンドボール競技におけるペナルティースロー(以下 PT)はシューターとゴールキーパー(以下 GK)の対一の場面であり、より確実に点数をとることができる。本研究では、有効な PT を行うための駆け引きについて検討するために、シューターの特徴、シューターの PT 時の動き、GK の動き、シュート結果について、学生レベル、世界レベル間で比較し、PT のシュート決定率を向上させるための基礎的な知見を得ることを目的とする。

【方法】

学生レベルは 2010 年全日本学生ハンドボール選手権大会、2011 年関東学生ハンドボール大会(春季リーグ・秋季リーグ)、世界レベルは 2009 年女子世界選手権を対象試合とした。観察項目は、選手、利き腕、オフenseポジション、立ち位置、7m ラインからの距離、フェイクの有無、シュートタイミングの有無、GK の立ち位置、シュートコース、シュート結果の 10 項目であった。選手のレベルと観察項目、GK の立ち位置と観察項目との関係を明らかにするためカイ 2 乗検定と残差分析を行った。統計処理の有意性は 5%で判定し、10%以下の場合は傾向差ありと判定した。

【結果と考察】

1. レベル別の比較

GK の立ち位置については、学生の GK は中間、世界の GK は前に出る傾向が認められた。シューターの立ち位置については、学生は利き手側、世界は真ん中に立つ傾向が認められた(表 1)。7m ラインからの距離については、学生は 7m ライン際、世界は 7m ライン際と 7m ラインから離れて立つ傾向が認められた。フェイクについては、学生はフェイク無し、世界はフェイク有り無しを使い分ける傾向が認められた。シュートタイミングについては、学生はタイミング有り、世界はタイミング有り無し両方の傾向が認められた。一方、利き腕とシュートコースは学生レベル、世界レベルの間に有意な差は認められなかった。

2. 学生レベルにおける PT の駆け引き

7m ラインからの距離については、シューターが 7

m ラインから離れている時に GK は後、7m ライン際に立った時は中間に位置取りする傾向が認められた。シュートタイミングについては、GK の立ち位置が前や後の時はタイミング有り無し、GK の立ち位置が中間の場合はタイミング有りの傾向が認められた。一方、シューターの立ち位置、フェイク、シュートコース、シュート結果については有意な差は認められなかった。

3. 世界レベルにおける PT の駆け引き

7m ラインからの距離については、シューターが 7m ライン際に立つと GK は中間に立つ傾向が認められた。シュート結果は GK が前に位置取りをした時はノーゴール、GK が後の位置取りをした時はゴールする傾向が認められた。一方、シューターの立ち位置、フェイク、シュートタイミング、シュートコースについては有意な差は認められなかった。

【結論】

学生レベルの PT の特徴として、シューターがシュートを打つ前から GK をかわすために、7m ライン際に軸足を置いて利き手側に立ち、シュートは個人のタイミングで打つことがわかった。それに対して GK はゴールラインからゴールキーパーラインの間に位置取りをして全てのシュートコースに対応することがわかった。

世界レベルの PT の特徴として、大きな GK に対して全てのコースを狙うために、ほとんどのシューターが 7m ラインの真ん中に立つこと、7m ライン際に立ったり離れたりすることで GK との距離を変化させること、シューターはフェイクの有無を使い分け、個人のタイミングと技術でシュートを打つことがわかった。GK は自身を大きく見せるためにゴールキーパーラインまで出てくることがわかった。

表 1 シューターの立ち位置とレベルのクロス表

	学生	世界
非利き手側	25(25.0%)*	9(9.0%)*
真ん中	29(29.0%)*	90(90.0%)*
利き手側	46(46.0%)*	1(1.0%)*
合計	100(100%)	100(100%)

カイ 2 乗値=81.9,P<0.05